

## 『虞美人草』 藤尾と母にも一理あり

Junko Higasa 2013.11.30

欽吾は哲学的に人間としての自分の道を考える。そして大学を出ても働かない。そこに女たちを焦らせる一つの理由がある。明治の世は男社会である。女が働くことはできない。いくら財産があるからといって、働かなければいずれ家督は潰れるだろう。手をこまねいて見ているわけにはいかない。そこで母は思う。欽吾とはなさぬ仲の親子だから「働いてほしい」とは言いにくい。欽吾が働かないのなら、藤尾に働く養子をとって家督を守らなければならない。代々続いた甲野家を自分の代で潰したのでは申し訳ないし、何よりも世間の白い目に耐えられない。

そこで藤尾も思う。兄さんが働かなければ、家督を守れるのは私だけ。そのために男並みに勉強しているのよ。見てらっしゃい。立派な婿をもらってみせるから。たとえ世間の男たちに黷られようと、私が甲野家の財産を守るわ。身を落とすのは厭よ。

しかし、欽吾の言い分はこうである。もし藤尾と母が本当の家族として接してくれれば、面倒を見る気である。向うが自分を疎むなら自分も動くものか。

要するにこの親子は愛のコミュニケーション不足なのである。人間の魂同士の接触がない。互いの立場だけを考えて、表面だけの付き合いをしている。

漱石はここで『それから』の代助のように財産に依存する男への批判を含ませながら、真実の愛を持った心のふれ合いが大事だということを描いている。